

人参養栄湯を使いこなす ① 十全大補湯との違い

入江漢方内科クリニック吉祥寺 入江 祥史



最近「フレイルに人参養栄湯」というフレーズをよく耳にする。

フレイルについては今更多言を要しないだろう。本連載では「ちょっとマイナーな人参養栄湯を、いかに日々の臨床で使いこなすか」に重点を置いてお話ししていく。

さて、まずは人参養栄湯の「効能又は効果」を見よう。

【人参養栄湯】

病後の体力低下、疲労倦怠、食欲不振、ねあせ、手足の冷え、貧血

とある。どこか他でも目にした気がする文言だ。

【十全大補湯】

病後の体力低下、疲労倦怠、食欲不振、ねあせ、手足の冷え、貧血

なんと、一言一句違わない(!)ではないか。

では、これら2処方はどう使い分けるのか。これでは全くわからない。このような患者さんが受診した場合、「どちらを用いても大差ない」どころか、「効果は同じ」でなければならないことになる。そうなると、2処方を使い分ける必要がない。各大手漢方薬メーカーが2処方とも作っているのは意味不明ということになる(そんなバカな!)

使い分けはあるはずだ。その根拠とコツを知るために、まずは①原典に当たり、さらに②構成生薬の違いを検討してみる。

実は2処方とも、同じ「大平惠民和劑局方(和劑局方)」が出典だ。しかも同じ章立て(巻之五)に並んでいる。当然「区別して用いよ」ということだ。

まず十全大補湯が「治諸虚」の項で紹介されている。漢文のままだが雰囲気は伝わるだろう。

【十全大補湯】

治男子婦人諸虚不足、五劳七傷、不進飲食、久病虚損、時発潮熱、気攻骨脊、拘急疼痛、夜夢遺精、面色萎黄、脚膝無力、一切病後、気不如旧、憂愁思慮、傷動血気、喘嗽中満、脾腎気弱、五心煩悶、併皆治之。

此薬性温不熱、平補有効、養気育神、醒脾止渴、順正辟邪、温暖脾腎、其効不可具述。

続いて人参養栄湯が「治痼冷」に登場する。

【人参養栄湯】

治積劳虚損、四肢沈滞、骨肉酸疼、吸吸少気、行動喘噎、小腹拘急、腰背強痛、心虚驚悸、咽乾唇燥、飲食無味、陰陽衰弱、悲憂慘戚、多臥少起。久者積年、急者百日、漸至瘦削、五臓気竭、難可恢復。又治肺与大腸俱虚、咳嗽下痢、喘乏少気、嘔吐痰涎。

さて、重要な点を表にしてみるとこうなる。

処方	項目	主治
十全大補湯	治諸虚	男子婦人諸虚不足～
人参養栄湯	治痼冷	積劳虚損～

「諸虚」とは、文字通り「すべてが足りない」状態、漢方的には気血両虚の状態だ。

次は「痼冷」だ。痼というのは、長年かかってできあがった「しこり」という意味で、痼冷とは冷えがしこりになっている状態である。簡単にいえば、慢性的冷えによる諸症状だ。

「積劳虚損」というのは、人生の労苦が積み重なって老いに至り、諸機能が衰えているとも取れる。なるほど、ここから人参養栄湯→高齢者のフレイルへと繋がるのか。一方で十全大補湯は「男子婦人」と、とくに老若男女を問わないようだ。

使い分けのポイントはどうやらこの辺にありそうだ。

(次号へ続く)